Vol.07

# けもの新聞

The Wildlife Times



喜多方市鳥獣被害対策実施隊がお送りする野生鳥獣に関する情報紙です。「けもの新聞」アンケートを実施しています。

## 変わったのは動物か、人間か

少し誇張した表現かもしれませんが、ある鳥獣被害対策の専門家が、「サルは人間のことも同類だと認識しており、人里に現れて縄張りを主張している」という話をしていました。そこで〝縄張り争いを仕掛けてきている〟という説について、具体的に想像してみましょう。

かつて人々は、土地を求めて山を切り開き、農地を耕すことで、現在の集落を築いてきたと考えられます。もともとそこは、動物たちの世界であり、サルからすれば、そのときに人間との縄張り争いに敗れたということになるのでしょう。住処を追われたサルは、縄張りを取り戻そうにも、大勢の若い村人が日の出とともに田畑を耕し、日が暮れるまで活動している様子を前に、付け入る隙が見出せなかったのかもしれません。

しかし、それから長い年月が経ちました。果たして、今はどうでしょうか。少しずつ農地は荒れ始め、田畑で働く村人はまばらになり、かつてのように活気あふれる若い人間の姿もあまり見かけなくなりました。

今私たちの置かれている状況は、前述の専門家の話のとおり、かつて居場所を奪われたサルが縄張りを取り返そうと、争いを仕掛けてきている状態なのかもしれません。そして、それはサルに限らず、あらゆる野生動物にも当てはまることではないでしょうか。もっとも、〝今〟しか知らない私たちにとっては、ただ「動物たちの行動が変わってきた」としか思えないのかもしれませんが。

専門家はこう指摘します。「野生動物の行動は昔から何も変わっていない。変わったのは人間の生活や環境の方である」と。

現在の状況も、人間と動物が織りなしてきた長い歴史の中では、ほんの一瞬に過ぎません。しかし今、私たちは、その関係が大きく変わる転換期を迎えているのではないでしょうか。

裏面に続く

問い合わせ：喜多方市鳥獣被害対策実施隊（市民生活課有害鳥獣対策室）☎（24）5261

理想の鳥獣被害対策とは…

# 昔の農村を復活させれば良い？




## 「理想」と「現実」

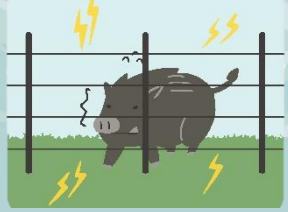
鳥獣被害対策について、よく「抜本的な対策はないか」と質問を受けます。野生動物の被害が現在ほど深刻でなかった時代に戻すことができれば、被害はなくなることでしょう。しかし、それは現実的に可能でしょうか。例えば、上記の図をご覧になれば実現がいかに難しいかは明らかです。

そこで、重要になるのが鳥獣被害対策の基本「鳥獣被害対策の三本柱」です。出没する動物の生態や、各集落の状況に応じて対策を組み合わせ、複合的に実施していくことが、最も現実的で実効性の高い対策です。

もちろん「全頭駆除」や「街全体を塀で囲う」など、極端な理想を追求した対策案はいくらでも挙げられます。しかし、重要なのは、「何の動物から何を守るのか」「限られた労力、予算、人員をどう活用するか」など、それぞれの状況において、具体的に検討し、少しずつでも持続可能な対策を講じていくことです。

## 鳥獣被害対策の三本柱

### 被害防除
＝ まもる ＝



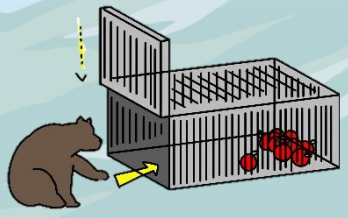
農作物などへの被害を防ぐためには、電気柵や金網柵の設置などにより、野生動物の侵入防止を図ることが最も効果的である。

### 環境整備
＝ よせつけない ＝



野生動物の通り道となり得る藪などの刈払いや、動物を誘引している果樹などの適正な管理を行い、動物を寄せ付けない環境を整備する。

### 捕獲
＝ とる ＝



被害を引き起こす野生鳥獣の個体数を調整したり、有害な個体を駆除する。他の対策が進んでいるほど捕獲効率は上がる。

次号に続く

発行日：令和８年 10 月 29 日（木）